

報 告

「学生による講義」の評価

—母性看護学概論の中での試み—

Evaluation of "student lecture"
— A trial in maternal health nursing program —

大森 智美¹⁾, 穴戸 路佳¹⁾, 岡部 恵子¹⁾

Tomomi Oomori, Mika Shishido, Keiko Okabe

キーワード：学生による講義, 参加度, 満足度

Key words : Lecture university student, Degree of active participation, Degree of satisfaction

要 旨

本研究は、母性看護学概論の講義の中で行った「学生による講義」について、授業の評価と課題を明らかにし、今後の授業展開を考えることを目的に行った。研究方法は2年生81名を対象にアンケートを実施した。調査内容は、「学生による講義」という授業方法に関する評価を「方法評価」、「参加度評価」、「満足度評価」とし5段階で評価してもらい、評価理由を自由に記載してもらった。その他、活用教材等について調査した。「方法評価」、「参加度評価」、「満足度評価」では、「5」及び「4」の「とても良かった」、「良かった」としたものはそれぞれ80%、78%、60%であった。学生の評価理由より、これらの評価にはグループメンバーの協力体制の有無が大きく影響していることがわかった。また講義に必要な資料等を作成するための活用教材は、インターネットからの情報を利用しているグループが最も多く96%であった。

I. はじめに

現在の大学に求められている役割は、高度で専門的な知識を備えた人材の育成と社会の発展に貢献することである。これをもちに、平成18年に教育基本法が改正され「大学については、自主性、自律性、その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない」という条項が設けられた。広辞苑によると、自主とは「他人の保護や干渉を受けず、独立して行うこと」であり、自律とは「外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること」である。自主、自律ともに、主体性をもって自らの目的を達成に向けて行動することを意味する。

本学の建学の理念の一つに、「自らが考え、求め、努め、以て自らの生長を主体的に開展し得る人間の育成」が謳われている。日本看護協会看護継続検討会(1980)によると、主体的行動の価値は、自らが具体的に目標を設定し、判断した時、それに伴う責任を自覚でき、このように判断して実施した行為の成果を、自らの価値基準に照らして確認するとき、初めて達成感を持つことができ、かつ、その達成感が、その人の仕事を動機づけることにあるといっている。

看護学科2年次前期に行われる「母性看護学概論(2単位30時間)」において、母性看護学に関しての教授とともに、主体的学習態度を育成することを目的として、学生参加の学習(共同学習)を組み入れたいと考えた。

受付日：2007年10月9日 受理日：2007年12月5日

1) 埼玉医科大学保健医療学部看護学科(母性看護学)

そして「学生による講義」という授業方法を取り入れることとした。学生にはこれまでにテーマに関して議論・報告するという授業は行ってきたが、シラバスに表示した講義内容に関して講義するという授業展開ははじめての試みであった。

この授業方法の実施時に各回の講義出席カードに書き込まれた学生の感想は、この授業方法を肯定するものが多く、講義聴講姿勢も真剣であった。しかし、時間の不足、資料と視聴覚教材の活用方法の不十分さ、グループ編成上の問題等いくつかの課題を提示する記述もあった。そこで、「学生による講義」の評価と今後の課題を明らかにしたいと考え、学生の協力を得てアンケート調査を行った。

II. 学生による講義導入の実際

母性看護学概論は、女性のライフサイクル全般に関して教授する。具体的には、母性の概念に始まり、人間にとっての性と生殖の意義、リプロダクティブ・ヘルス

ライツ、母性看護の変遷・法律、そして女性のライフサイクル各期の特徴・健康問題と看護等である。この授業展開の中で、学生が講義することが可能(時間と学習進行過程との関係において)であるかの視点で検討し、「学生による講義」の実施の時期、テーマを決定した。

今回は思春期・成熟期の特徴を講義した後、「思春期および成人期における女性の健康問題と看護」、「ライフサイクル各期にまたがる健康問題と看護」に関する内容を学生の講義課題として課することを決定した。

また、全学生が講義に関わることを条件とし、グループ活動として検討しグループで講義するという方法を選定した。グループ編成(1グループ8名, 11グループ編成)とテーマの割り当ては講義担当教員が決定した。(表1)

III. 研究目的

「学生による講義」という授業方法の評価と課題を明らかにし、今後の授業展開を考える。

表1 母性看護学概論 「学生による講義」の経過

4月12日	第1回講義	学生が講義をする時間を計画していることを予告した。
4月26日	第3回講義	講義のオリエンテーション：グループメンバー及びテーマと講義日時を発表した。その際に講義時間中にグループでまとめや学習する時間はとれないため、講義時間外でまとめて欲しいこと、配布資料の枚数はA4サイズ2枚を上限とし、配布資料は講義前日までに提出することとした。講義時間は15～20分程度、講義時は視聴覚教材やOHCなどを使用してよいことを説明した。テーマの範囲としては教科書に載っている範囲でよいとし、参考資料として書籍などが図書館にあること、もしくは教員も資料をもっているのので借りに来てよいこと、さらにインターネットの活用について説明した。
5月17日	第5回講義	講義後半30分程度、グループで進め方について話し合う時間をとった。
6月21日	第10回講義	講義後半、グループ講義準備のための時間をとった。
6月28日	第11回講義	学生の講義：①月経異常と看護 ②性感染症の現状と看護 ③人工妊娠中絶の現状と看護 ④若年妊婦の現状と看護
7月5日	第12回講義	学生の講義：⑤月経随伴症状と看護 ⑥子宮筋腫と看護 ⑦子宮内膜症と看護 ⑧卵巣嚢腫と看護
7月12日	第13回講義	学生の講義：⑨子宮がん・卵巣がん看護⑩喫煙女性の健康問題と看護⑪性教育の考え方
7月19日	第14回講義	学生の講義内容について、グループごとに補足説明を教員が行った。

IV. 研究方法

自記式アンケートによる調査。調査対象は、2年次全学生。

調査内容：「学生による講義」という授業方法に関する評価を「授業方法に対する評価(以下、方法評価とする)」、「グループ学習への参加度の評価(以下、参加度評価とする)」、「グループ学習に対する満足度の評価(以下、満足度評価とする)」とし5段階(「5」とてもよかった、「4」よかった、「3」どちらとも言えない、「2」よくなかった、「1」とてもよくなかった)にて評価を求めた。その他活用教材、講義時の配付資料、講義時間等について調査した。

アンケートは、最終回の講義終了直後に配布し、当日中の提出とした。

集計は単純集計とした。

V. 倫理的配慮

アンケート協力に際しては以下のことを学生に伝えた。アンケートは無記名であり、個人が特定されることはないこと。アンケートの提出は学生の自由意志であり、協力の是非が成績等に影響することはないこと。アンケート結果は今後の教授方法の改善のために活かし、その目的以外に使用することはないこと。紀要等にて公表する可能性があること。

VI. 結果

2年生 88名のうち7名が当日欠席していたため、アンケートの配布は81名に行い、協力が得られたのは50名であった。回収率61.7%であり、すべてが有効回答であった。

1. 本形式の授業に対する評価

1) 方法評価

方法評価の結果は、「5」と評価したものの21名(42.0%)、「4」と評価したものの19名(38.0%)、「3」と評価したものの7名(14.0%)、「2」と評価したものの3名(6.0%)、「1」と評価したものの0名であった。

「5」と評価したものの21名の評価理由は22個あり、1名は理由を2つ記述していた。その評価理由は「グループ活動の意義について記したものの」、「自分たちで調べ

ることの楽しさ・価値について記したものの」、「学生同士の質問のしやすさについて記したものの」、その他はどのカテゴリーにも含めることのできないものである。「4」と評価したものは、「自分たちで調べることの楽しさ・価値について記したものの」、「内容が理解しやすく、よい学びができたから」、「学生同士の質問のしやすさについて記したものの」、「少し不足・不満があったから」とするもの、「教員の関わりについて記したものの」の5つのカテゴリーに分けられた。「3」と評価した7名のうち5名が理由を述べており、「2」と評価した3名は、1名が2つの理由を述べていた。この「3」と「2」の評価理由は意見が分散していたため、カテゴリーに分けることはできなかった。すべての評価について、各カテゴリーの評価理由で共通している内容を明確に表現しているものを代表例として表に掲げた。(表2)

表2 方法評価の理由

「とてもよかった」 評価の理由	自分達で調べることの楽しさ・価値について記したもの：8名	・自分達で調べるので、自分の関心にそっていろいろ調べられた。 ・教員の講義だけでなく私たちが主に行う授業であって、皆にうまく伝わるにはどうしたらよいかなど考えられたから。
	グループ活動の意義について記したもの：6名	・自分のグループで調べたので詳しく理解できたり、他のグループの調べたものも学べたから。 ・グループで楽しくテーマにそって討論できたから。
	学生同士の質問のしやすさについて記したもの：4名	・自分が気づけなかったことに気づいて質問してくれたのでよかった。 ・視点が学生同士なので質問がしやすかった。
	その他：4名	・学生同士の授業だと内容に入り込みやすかった。 ・いろいろな発表があって面白かったから。
「よかった」 評価の理由	内容が理解しやすく、良い学びができたから：6名	・さまざまな分野について学ぶことができたから。 ・分かりやすい言葉で説明してもらえたから。
	少し不足・不満があったから「4」とするもの：5名	・良い学習ができたと思うが協力しない人がいて困ったことがあった。 ・調べる内容をもう少し指定してほしいから。
	自分達で調べることの楽しさ・価値に関するもの：2名	・自分たちで講義することは責任もあり相手に伝えるために自分たちがきちんと理解していないといけないのでかなり主体的に学びができたから。
	学生同士の質問しやすさについて記したもの：2名	・仲間同士なので質問もしやすい雰囲気や自然に行こうという気になった。
	教員のかかわりについて記したもの：1名	・教員の熱意が感じられたから。
「どちらとも言えない」 評価の理由	カテゴリーに分けられず：7名	・グループによって内容の差(深み)がでるから。 ・グループ分けをバラバラにしてほしいから
		カテゴリーに分けられず：3名

2) 満足度評価

満足度評価の結果は、「5」と評価したものの10名(20.0%)、「4」と評価したものの20名(40.0%)、「3」と評価したものの15名(30.0%)、「2」と評価したものの3名(6.0%)、「1」と評価したものの2名(4.0%)であった。

満足度の評価理由は、「5」と評価したものの10名のうち7名が理由を記述しており、「グループメンバーの協力姿勢への満足感をあげるもの」、「達成感をあげるもの」、「発表に対する満足感をあげるもの」の3つのカテゴリーに分けられた。「4」と評価したものは20名のう

ち16名が理由を記述しており、「グループメンバーの協力関係がよかったからとするもの」「発表の成果について満足を示すもの」、「少し不足・不満があったから」とするもの、「楽しかったから」の4つのカテゴリーに分けられた。「3」と評価したものの15名のうち10名が理由を述べており、「グループ活動の不足について述べるもの」、「発表の成果についての不足を述べるもの」の2つのカテゴリーに分けられた。「2」、「1」と評価した5名は評価理由の記載がなかった。(表3)

表3 満足度評価の理由

「とてもよかった」 評価の理由	グループメンバーの協力姿勢への満足感をあげるもの：3名	・皆でそれぞれしっかりと調べてきてくれて質問にもしっかりと答えられたので。
	達成感をあげるもの：2名	・至らないところもあったと思うがやり遂げることができた。
	発表に対する満足感をあげるもの：2名	・質問にこたえられた。
「よかった」 評価の理由	少し不足・不満があるから「4」とするもの：8名	・もっと詳しく調べればよかったと思うから。 ・質問されるであろうことを予測しておくべきだった。
	発表の成果についての満足を示すもの：4名	・質問されて気づいたことがあったから。
	グループメンバーの協力関係がよかったからとするもの：3名	・1ヶ月も前からいつ集まるか、いつまでにまとめるかなど充実した活動ができたし、皆協力的だったから。
	楽しかったからとするもの：1名	・楽しいと思えたから
「どちらとも言えない」 評価の理由	グループ活動の不足について述べるもの：2名	・協力できたのかどうか判断できないので。
	発表の成果についての不足を述べるもの：8名	・発表で他の人からの感想で難しすぎたという意見があったので、分かりやすく理解できるように伝えるのが不十分だったから。 ・もっと内容を濃くして更に充実したものにしたいかった。グループ内で多く話しあったので時間ももっとほしかった

3) 参加度評価

参加度評価の結果は、「5」と評価したものの21名(42.0%)、「4」と評価したものの18名(36.0%)、「3」と評価したものの10名(20.0%)、「2」、「1」と評価したものは0名であった。

参加度の評価理由は、「5」と評価したものの22名のうち13名が理由を記述しており、「グループ活動が満足のいくものだったから」、「グループメンバーとして責任ある行動が取れたからとするもの」、「学習活動の結果として満足を表すもの」の3つのカテゴリーに分け

られた。「4」と評価したものの18名のうち10名が評価理由を記述しており、「グループ活動が満足のいくものだったから」、「自分として関わったと思えるから」、「自己の学びがあったから」、「その他(いずれのカテゴリーにも含められないものの集まりである)」の4つのカテゴリーに分けられた。「3」と評価したものの10名のうち6名が評価理由を記述しており、「自分自身の参加姿勢の不十分さをあげるもの」、「グループとして最後まで活動しなかったから」とするもの」の2つのカテゴリーに分けられた。(表4)

表4 参加度評価の理由

「とてもよかった」 評価の理由	グループメンバーとして責任ある行動がとれたからとするもの：6名	・グループの一員としての責任があるし、興味ある内容だったから。 ・グループワークだから誰かがやってくれると考えたくなかったし、色々な人の意見を聞いたり一緒にやることで考えが深まりそうだったから楽しくて自然に参加できた。
	学習活動の結果として満足を表すもの：4名	・納得のいくものが出来たから。 ・自分の意見を言うことができたから。
	グループ活動が満足のいくものだったから：3名	・協力しあおうという思いが強かったから。 ・グループ皆が分担して同じようにできた。
「よかった」 評価の理由	グループ活動が満足のいくものだったから：4名	・皆と協力して授業外で時間を作って集まったりと積極的に出来たと思う。 ・よく話し合ったから。
	自分として関わったと思えるから：3名	・積極的に関わられた。
	その他：2名	・人数が多すぎて分担したが、まとめるときは2人がパソコンに向かう形になってしまったので。
	自己の学びがあったから：1名	・インターネットや図書館で調べることができたから。
「どちらとも言えない」 評価の理由	自分自身の参加姿勢の不十分さをあげるもの：4名	・自分の予定と重なってしまい話し合いに参加できなかった。 ・必要最低限しかやっていないので。
	グループとして最後まで活動しなかったからとするもの：2名	・自分で調べる内容を調べ終え、パワーポイント係りに渡し、最後まで皆で確認しなかったし、それまで集まらなかったから。

2. 方法評価と満足度評価と参加度自己評価の比較

方法評価、満足度、参加度の3つの評価項目を比較したところ、「5」評価は、参加度は22名(44.0%)、方法評価は21名(42.0%)であるのに対し、満足度は10名(20.0%)であった。「4」評価は満足度20名(40.0%)、方法評価19名(38.0%)、参加度17名(34.0%)であった。「2」と「1」の評価の合計は、満足度5名(10.0%)、授業評価3名(6.0%)であり、参加度には「1」と「2」の評価はなかった。(図1)

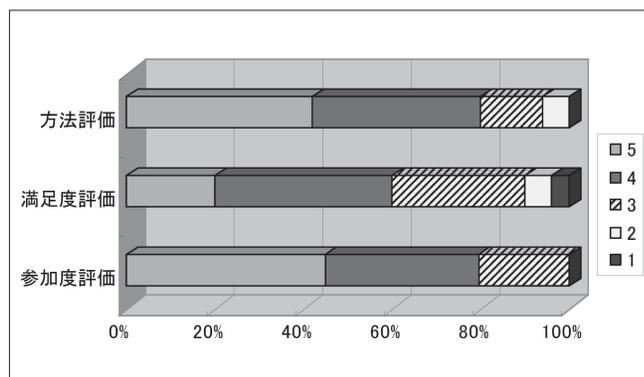


図1 方法評価・満足度評価・参加度評価の比較

3. 図書館の活用状況

図書館の活用状況は、「活用した」は22名(44.0%)であった。22名中1回が10名、2回は10名であり、3回以上は2名であった。

図書館の資料を活用しなかった理由として、3名が図書館に資料が少ないことをあげ、2名は「図書館に資料が少ないためインターネットに頼らざるを得なかった」と記していた。(表5)

表5 図書館の活用状況

n = 50		
活用の有無	回数	人数
活用した 22名(44.0%)	1回	10
	2回	10
	3回	1
	4回	1
活用しない		28

4. 使用教材の活用状況

教材の活用状況は、インターネットを48名(96.0%)のものが使用していた。次いで、現在使用しているテキスト29名(58.0%)、その他のテキスト・参考書は18名(36.0%)、雑誌の活用は7名(14.0%)であった。

また活用した教材の種類は、2種類が最も多く、次いで1種類、3種類であり、4種類以上は2名(4.0%)で

あった。また、1種類をあげる15名全員がインターネットを活用していた。(表6)

表6 教材の活用状況

n = 50	
活用したもの	人数 (%)
指定された教科書	29(58.0%)
指定以外の教科書	18(36.0%)
インターネット	48(96.0%)
看護・医学系の雑誌	7(14.0%)
その他	2(4.0%)

5. 教員への相談状況

学習のプロセスの中で「教員に相談したか」の問いに対して、「相談した」は5名、「相談しなかった」は45名であった。相談した理由は「提出方法など具体的にわからなかったので」「資料がないため」「調べ方が思いつかなかったの」としている。教員に相談しなかった理由は、「(集めた)資料だけで作れたから」「グループメンバーで話し合って作れたから」「皆がたくさんの情報を持ち寄れたので」など、グループで話し合い進められたとするものであった。「特に問題がなかった」とするものも1名いた。

VII. 考 察

1. 方法評価・満足度評価・参加度評価との関連について

今回の学生による講義中、講義者の学生、受講者の学生ともに学習態度は真剣で、質問・意見なども数多く出されていた。しかし、「学生による講義」という方法についての評価やグループ活動の参加度評価は4段階以上の「とてもよかった」あるいは「よかった」としたものが78～80%であったのに対し、満足度については「よかった」と評価したものは60%であり、他の2つの評価と比較すると低い値となっていた。

方法評価の中で「とてもよかった」あるいは「よかった」と評価した学生の評価理由は、自分たちで調べることの楽しさやグループ活動の意義について述べているものが多かった。また、参加度を「とてもよかった」あるいは「よかった」とする評価理由は、グループメンバーとしての行動や活動が満足いくものだったからと述べているものが多く、満足度についても「よかった」と評価しているものは、グループの協力体制がよかったことを理由として述べているものが多かった。グループによる講義は、母性看護学として求める内容としてのグループ間に大きな差はなく、満足度、参加度評価は低くはあっても、何人かのメンバーで努力した結果としての講義であったといえる。これら3つの評価項目の「とてもよ

かった」「よかった」の理由には共通してグループメンバーの協力体制のよさが述べられており、それが評価に影響していることがわかった。

Deborah(1999)はグループ学習の成果は、考え方や分析の仕方だけを学ぶのではなく、仕事の世界で役立つ結論を学びながら、チームで効果的に働く方法を学ぶと言っているが、グループでの学生の講義は知識を身につけるだけではなく、グループ内での協力体制や個人の参加姿勢までも考える機会となる。グループワークを通して、グループとしての機能が成熟していくことが学習の成果に影響するということである。満足度のもたらす意味は、今後への学習意欲への影響である。それゆえ今後こうしたグループワークによる学習方法を取り入れていく場合には、グループの機能が円滑に進行するよう支援し、満足度も高めていくことも必要であると考えられる。

2. 学習資源の活用と環境の整備について

今回の学習のプロセスにおいて、学習資源として教員の活用は少なかった。オリエンテーションにおいては、教員も相談にのることを伝えたが、学生の方から相談にきたものは50名中5名であった。教員に相談しなかった理由を、「グループメンバーで話し合っただけで作れたから」、「(集めた)資料だけで作れた」などと学生は述べている。つまり教員に相談する必要性がなかったということになる。学生は、自分たちの探せる範囲内での資料によって講義内容や資料等を作成することだけで充分と感じていたと予測できる。しかし、作成したものをさらによいものにしようという学びの態度も必要である。そのために教員を資源として活用することができるような働きかけやその機会をより積極的に示していく必要がある。David W.J.(1991)はグループワークにおける教師の役割は、本やビデオにある情報をくり返すことではなく、内容の意味や情報を学生が展開し、応用し、構築できるように援助することであると言っている。今回グループ活動の経過中に、学生が迷いや困難に遭遇したか否かについてはアンケートからは不明であるが、教員側も学生に声をかけ、教員がグループ学習に関わることによる効果を、学生が体験できるように関わっていく必要がある。

学習資源の活用については、オリエンテーションの際、図書館の使用や現在使用しているテキスト、参考書の活用をすすめたが、実際に紙媒体の資源を活用した学生は少なかった。本学は新設学部であり、図書館に参考資料が少ないと書いている学生もいたが、資料の検索方法や活用方法が十分理解されていないとも考えられる。そこで文献検索や活用についての学習の現状を確認し、指導していくことの必要性も示唆された。

今回のグループ学習に際し、最も使用されていた教材はインターネットから入手した情報であった。インター

ネットはパソコンの前にいるだけで、膨大な情報が短時間のうちに手に入り、URLを共有すればグループメンバー全員が同時に同じ資料を得られるという便利なものである。これもまたインターネットによるものが多かった理由と推測できる。またホームページから次から次へと新たな情報を入手することは、ゲームと共通する感覚があることも、学生が学習方法として一番に選択した理由と考えられる。しかしインターネットの情報はすべてが新しいものとは限らず、ホームページの管理者も匿名の場合も多く、情報の責任が曖昧なことが多い。学生の中には「インターネットから資料を集めるとどこか不安で、確かなことなのかなと思った」と記している学生もいた。インターネットで入手した情報が信頼できるものであること、または情報の信頼性を判断できることがインターネットを使用するには必要である。そのために教員はインターネットから入手した情報と書籍等の情報を照らし合わせることの必要性を教え、正確な情報を把握していくように指導することが大切となる。

3. 今後のグループワークによる授業展開上の課題

グループワークのあり方が、学習の満足度、参加度に影響していることが示唆された。そして、今回グループ活動が円滑にできなかったことが推測できるグループも実際にあった。方法評価を「2」と評価している学生の理由は、「グループの集まりが悪くて大変だった」と記している。積極的なグループ活動が行え、よりよい学習を行うためには、教員は単に課題についてだけでなく、事前に学生にグループ学習の意義とグループによる講義の導入の目的を十分理解できるよう伝えていく必要があった。なぜグループで学習するのか、その目的とそこから何を学んでほしいかが理解できると、学生はこのグループにどのような姿勢で取り組んでいったらよいかを考えることができたのではないかと考える。

また今回はグループ編成と、グループごとのテーマを講義担当の教員が決定した。学生個人にも学習の興味や関心の高い分野があることを考えると、テーマを自ら選ぶようなグループ編成の仕方も検討する必要がある。より関心の高いテーマを担当することになれば、学生のモチベーションは当然上がり、グループへの参加も積極的になると予測できる。

また、今回はグループワークを、2回(グループで作業を開始した時期と、発表直前の時期)講義時間内に確保し、以降は講義時間外に話し合い準備するように指示した。しかし今回の結果から、グループワークのあり方が満足度評価、参加度評価に影響していたことが明らかになった。これは講義時間内のグループで作業できる時間の設け方を再考する必要があることを示唆されている。講義時間内にグループワークの時間を設けることに

よって、教員が学生のグループへの参加状況の確認や学習内容への助言を行うことができ、学生も教員が関わることの効果を感じやすいのではないかと考えられる。

VIII. 終わりに

今回、本学における第1回生の「母性看護学概論」の授業において、学生の主体的学習活動をねらいとして「学生による講義」という授業方法を取り入れた。感覚的にはこの講義方法は、学生の積極的参加を促していると評価してはいたが、はじめての試みであり、学生による評価が必至であると考え、アンケートを実施した。その結果、今後の課題を多く提示されはしたが、継続していく価値も見出された。そして、所謂「講義」という授業展開の中で、どのように学生の主体的学習参加を取り入れていけるかの示唆を得ることもできた。

しかし、今回のアンケートへの協力者は61.7%と少なかつたため、受講者33名の評価は得られていないと

いった状況の中での結果である。これは、本調査が母性看護学概論の最終日であり、学部の実施する授業評価と同時に実施したこと、翌日より夏季休暇に入ったこと等も協力者の少なかつた一因と考えられ、授業評価をどのように学生から得ていくかも課題である。

教育も看護同様相互関係の中で行われるのであれば、今後も授業展開に関する評価をどのように行うのがよいのかを考えていきたい。

文 献

- David W.J.,Roget T.J.,Karl A.S.(1991)/ 関田一彦 (2003): 学生参加型の大学授業—共同学習への実践ガイド (第1版), 玉川大学出版部, 東京.
- Deborah L.U.,Kellie J.G.(1999)/ 高島尚美 (2002): 看護教育におけるグループ学習のすすめ方 (第1版), 医学書院, 東京.
- 日本看護協会看護継続検討会 (1980): 看護職団体における80年代の継続教育の課題と展望, 看護, 32(8), 34-67.